私の保育

船津和子

今年の四月、昨年度に引きつづき年長児三十六名を受け持って、はや六ヵ月が過ぎようとしている。この子どもたちを受け持つ事が決まった時、私自身の課題として『子どもに振り回される私でいたい』『子どもたちひとりひとりがもつ秘めた宝を少しでも多く見つけたい』との願いをもってスタートした。そして、この六ヵ月間に子どもたちの秘密の箱から、少しずつすばらしい宝物をみせてもらっている。その中からいくつかをここに記してみたい。

一学期はとにかく『ひとりひとりにまかせる生活をしよう』という事で、ひとりひとりが遊びに没頭し力を出し切るために、できる限り自由遊びを増やしその中で子どもひとりひとりとかかわっていくようにした。

実際の保育がはじまってみると、つながっていた糸が全部切れたように三十六名が三十六の方向へつっぱしっていった。願ってはいたものの自分との戦い。一瞬でも遊び込んだ満足感がもてるようにとの切なる願いをもったり、見守ったり。

あるお天気のよい日、近くの広場に遊びに行った。が帰

る時に三名足らないのに気づき、あわててあたりを捜し回ったところ、土手で拾ったカップヌードルの入れものを手に我がクラスの大将三名が、あまりきれいとは言えない川に向かってかけおりていく。「どこ行くの――」と声をかけると「ちょっとのど乾いたから水飲んでくる――」との返事、あーなんと返事をしてよいやら、うれしいやら、悲しいやら、行かせてみようか？　まかせる事とは自分との戦いなり、が実感。

一学期後半、ほんの少し遊びにじっくり取りくむ姿もみられるようになった頃、あまり他の者のかかわりをもたずひとり遊びが主であったI、M、F、H男の四人が、ケーブルカーづくりをはじめた。ケーブルカーはトイレットペーパーの芯を二つ合わせ、長い筒をつくり、穴をあけ、ひもを通して半日がかりで完成。その後イスから床にひもをわたし、ケーブルカーが落ちてゆく角度とひもの長さを何べんもやり直していく。そして遂にロッカーの上にあがり壁から床の真中にひもをわたす。この頃ケーブルカーの中に加速度を増すためにビー玉を入れはじめた。すると穴からビー玉がとび出てうまくいかない。私は、せっかくいい遊びをしているのだから、ここで助言をした方がよいのでは、などと考えて「ビー玉を底にはりつけたらいいのではないかしら」と声をかけると、いつもおとなしいI、H男がものすごい顔をして「だめだよ。箱の中で上から下へおちてくるからそれでスピードが出るのだから……」と、それからしばらくして、ビー玉を入れる穴に蓋がされスピードも増し、すてきなケーブルカーができあがった。床にはられたひもも、セロテープ、ガムテープと変わり、イスの足に結える事で落ち着いた。

ケーブルカーの遊びがはじまってから三日間、試行錯誤し、失敗をくり返し、ブッかり合い、遂にやりとげた彼らの顔は三日前の顔とは違って自信に満ちていた。又、私はというと見当はずれな助言をしつつ、只部屋の真中にはられたケーブルの邪魔にならぬよう部屋の設置をし見守っているだけだった。そして私も失敗しながらじっくり子どもの活動を見つめる大切さを知った。

二学期始業式当日、夏休みを終え喜んで登園する子ども

たちの元気な顔の中で一人A子が寂しそうにやってきて「先生、私、今日幼稚園に来たくなかった。ランランが死んじゃったでしょ。私、動物園へ行きたかったの」と、この事を皆が集まった時、子どもたちに話すと、口々に「私も、僕も」と、一人が「手紙出そう」と提案、「いやだ、本当に行きたいよ」「じゃあどうやって行く」「ダンボールの中に入って行けばいいんだよ」G男は両手をいっぱいに広げて「これくらいあればさ、皆が入っていけるよ」「でも真暗でこわいわ」「懐中電燈もって行けばいいよ」「息ができないよ」「穴あけてさ、ストローでフーフーってやって息すればいいよ」「お腹がすくといけないからお母さんにおにぎりつくってもらう」等々と口々に発言。その間私は何も言わず首を右、左と回していただけ。それからすぐ、ダンボールを持ってきて中に入ったり穴をあけたりする作業がはじまった。

翌日、I男が本当に困ったという顔をして「郵便局までどうやって行ったらいいかな――、先生ひとりじゃ押して行けないよね」しばらく子どもたちも真剣に考えて「いい考えした。ダンボールに穴あけて足出して歩いて郵便局に行けばさ、先生も一緒にランランのところへ行けるよね」全員手をたたいて「そうしようそうしよう」私も夢中になって、どうしたらこの夢をかなえてあげられるかしら、郵便局の方にお願いすれば、何とかして行かせてやりたい、と私の頭の中はいろいろな思いが右往左往、この時の子どもたちに郵便についての話をしても何にもならない気がして……。

数日後、子どもたちと私は、ランランとカンカンへのお手紙をポストに出しに行ったのです。ひとりひとりが一生懸命、考え行動したのにこんなに一般的な方法でしか子どもたちの気持をあらわしてやれない自分の力の足りなさをかみしめながら……又こんなにも成長した子どもたちをうれしく思いながら……

おへやにおいてある大きなダンボールをきっかけに発泡スチロール、つみ木、机と組み合わさって売り買いごっこがはじまった。お金をつくる者、買い物をする者、輪つなぎや花かざりでお店を飾る者も出てきた。ままごとコーナーではせっせとお料理をつくりお店の人に食べさせている。お店も次々に増え、あっという間にクラス全体の活動

に広がっていった。三十六名が自分のなりたいものになりきって遊び、家へ帰りたがらぬほど、又、入れかわり立ちかわりいろいろ変化しつつこの活動が十日ほどつづいた。

その後、敬老の会をどのようにするかについてクラスで話し合う機会をもった。「月曜九時十五分からゆり組で秘密会議を開きますから遅れないように来ましょう」と約束、約束どおり月曜日へやを閉め切って秘密会議が開始された。「どうやっておじいさんやおばあさんを迎える？」の問いかけに「天井からきれいな飾りをつけてパーティみたいにしてびっくりさせる」「おみせ屋をする」と意見がでる。

そこでどのようにするか具体的に話し合う。飾りは輪つなぎとお花の形に切った折り紙をつなげたもの。お店はおばあさんたちが必要なもの。好きなお店という事で候補として薬屋、花屋、写真屋、あめ屋、ジュース屋があがる。

「じゃあ、これどうやってする？　みんなで全部する？」と聞くとS男が立ち上がって「やりたいやつがやりたいのをやればいいんだよ」と、そこで各々やりたいものに分かれ材料を用意しグループごとに製作が開始された。

飾りがほぼできあがったところで、今度は天井につけるためにはどうするかという事になる。「イスを重ねて台にしよう」「オルガンの上にイスをのせよう」と意見がでるたびに実際やってみるがいずれも失敗、するといつもあまり発言しないM男が「はしごがいい」と提案しさっそく皆で脚立を使って、へやの真中に飾りつける。（皆が製作に取り組んでいる間に脚立をもってきておこうか迷ったが、用意しないでおいてよかったと、ほっと胸をなでおろした）。飾りを取りつけるものも、のり、画びょう、セロテープとためされガムテープを使うとはがれずよくつく事を発見した。やっと天井に取りつけると、今度は左右がバラバラになっている事に気づき、左右が平均して形よく飾るためにはどうすればよいかを何度もしていくうち、長い輪つなぎを二つに重ね、折り目がついたところが真中である事がわかる。

このようにして多くの時間を使ったがひとりひとりが確実にいろいろな学びをしつつ準備がなされた。当日おばあさまたちは子どもたちが作ったバックを手に買い物を楽しまれ、写真屋さんで記念写真を撮り……とわずかな時間ではあったが楽しい時をもつことができた。

これら一連の活動を通して、クラスのまとまりとか、集

団の役割とか、グループ活動とかいわれるものが、ひとりひとりが意欲をもち全身でぶつかっていくとき、子どもたちの内側から創り出されてくるものである事、現在、いわゆる当番活動、グループ活動というものを私のクラスでは取り入れていないが、ひとりひとりの子どもが時に応じ、場に応じて必要を気づき行なう時、本当の意味での集団が成り立っていくことを見せられた思いがする。この活動が行なわれている間私は子どもと共に考え、驚き、感激の連続であった。又、子どもの本来持つ力、エネルギー、そして心を開き出すと大波のように寄せてくる彼ら自身に、私自身の足りなさの故に全部を受けとめてやれないもどかしさを感じた。

『こうしなさいと教えることは簡単だが、長い目標に対して、非常に寄り道と見える。むだと思える努力をさせながら幼児期を過ごしていく、それが意欲につながるのではないかと考えるわけです』と書かれてあった本を読んだことがある。まだまだ足りないところだらけだが、少しこれらを体験する事ができた。そしてこれからも寄り道をしていく保育がしたいと心から願っている。

一学期は一日中興奮して遊びが手につかず今まで身についていたと思われる生活習慣、集団生活のルールまでみだれ、テンデンバラバラ。反面「こうしなさい」と指示しレールを引いてあげると何も言わずに従ってくるという子どもから、少しずつ変化し、自分の生活を自分で創り出しはじめている。四月から彼らと共にいる私も、今までの経験の中から得られなかった最もすばらしい彼らの宝を見せてもらっている。聖書の中に『天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい。そしてこれを買うのである』とある。今、子どもたちは最も大切な高価な真珠を手に入れつつある。私も、子どもたちと共にこの年、この真珠を手に入れたいと願っている。そしてこの高価な真珠を手に入れるためにも、神さまが私のような者も許し愛して下さっているように、私も子どもひとりひとりを愛する事ができるよう、ありのままを受け入れる事ができるようにと祈らずにはいられない思いがする。

（神奈川・関東学院野庭幼稚園）